

井上円了思想における中国哲学の位置

佐藤将之

sato masayuki

はじめに

明治、大正時期の日本における最も代表的な啓蒙思想家、教育実践家の一人に数えられる井上円了は、その生涯にわたり確認されたもので182冊の単行本と講義録、それに850篇を越える論文や随筆などの膨大な著述を残した。(1) その知的関心も、仏教、純正哲学、日本主義、それにそうした知識を応用して提唱された妖怪学など、極めて多岐に及んだこともよく知られている。円了は東京大学に入学すると本格的に学術的著述を始めた。円了の東京大学在学は、年代で言えば、明治14年から18年まで、年齢で言えば円了23歳から27歳の時にあたり、現在ならば、ほぼ大学院就学年齢にあたっている。しかし、そのような中で、意外に見える事実がある。円了の東京大学における知的研鑽の総決算とも言える卒業論文に選んだテーマは、中国古代の思想家である荀子であったということである。周知のように、円了の著述は、妖怪関連や旅行記関連のテーマを除くと、純正哲学と仏教哲学の探求が学術的著述のほとんどを占める（ただしそれは後述するようにあくまで分量についてである）。円了はなぜ、卒業論文のテーマに仏教でもなく、純正哲学でもなく、学術分野としては当時まだほとんど実体のなかった中国哲学という領域から選んだのか？(2) そして何よりも、円了のその後の長い哲学的思索にとって、『荀子』というテーマは如何なる意義を持っていたのだろうか？筆者がそもそも本稿の執筆を思い立った動機である。

言うまでもなく、円了が荀子をテーマに卒業論文を書いたということ

は、円了の伝記、思想研究者にはよく知られていた事実である。「読荀子」(3)と名づけられたこの一文は、東洋大学が編纂した『井上円了選集』(以下『円了選集』と略称)の第25巻に収録されており、また一般読者にも理解しやすいように、原文ではカタカナであった漢文調の送り仮名がひらがなに変えられている。しかし、東京大学の卒業論文という初期の円了にとってはその思想の形成にとって一つのメルクマールとなるべき位置にあるこの論文が、『円了選集』最終巻のほとんど最後に、あたかも付録のような形で収録されているという事実自体には、素朴な疑問を感じざるを得ない。『円了選集』の編集に当たった円了研究者達がこの論文の位置づけに苦心している状況を反映しているのではないだろうかとも推察出来る。

ところで筆者の専門は、中国古代思想史であり(4)、特に荀子思想の解明を中長期的な研究テーマとして取り組んでいる。その一環として2003年頃より、江戸時代末期から昭和初期にかけての日本の荀子研究史の実情の把握が筆者の研究テーマのひとつになっていた。そこで、目録資料においてほとんど空白になっている明治・大正時期の荀子研究について調べ出したが、その調査のプロセスで、明治時期の東京大学、それに続く帝国大学の文科を卒業した錚々たる知識人達、例えば、瀧川亀太郎、服部宇之吉、藤田豊八、蟹江義丸、田岡嶺雲、久保天随(……まだまだ続く(5))らが、荀子について論文や解題を数多く残している実態が明らかになってきた。そしてそうした事実は現在、中国思想研究者からはもちろん、荀子思想研究者からさえ全く忘却されてしまっているのである。そうした理由から、筆者にとっては、明治・大正期における荀子論の発掘も、荀子思想そのものの解明と同じくらい重要な研究テーマになっていった。そんな折、筆者は2006年11月に『円了選集』第1巻の「解説」を担当されている針生清人氏に偶然お目にかかる機会があり(6)、円了の東京大学の卒業論文のテーマがまさに荀子だった

という事実を知り、円了という思想家を意識するようになった。ただし、筆者が勤める台湾大学には当時まだ『円了選集』が入っておらず、『円了選集』にその卒業論文が収録されていたことも知らなかったのも、円了が荀子についてどのような論述をしていたのかを具体的に知ることは出来なかった。その後、この懸案について知見を得るため、2008年に、ついに東洋大学の井上円了記念学術センターで資料調査をすることにした。そして幸運なことに、同センターの三浦節夫教授より、明治17年の『学芸志林』オリジナル版の「読荀子」の他、『円了選集』には収録されていない円了の中国思想関係の論文、円了が講義や読書の際に筆記したノート類のコピーの提供を受ける幸運に恵まれた。筆者は、こうしたいきさつを経て、井上円了記念学術センターから提供を受けた資料をもとに、円了と「読荀子」を含む中国哲学との関わり合いを調べ始めた。また、その際、井上円了研究会第三部会編による『井上円了関係文献年表』も参考にしつつ、「読荀子」に関してだけでなく、中国哲学全体との関連から円了思想を専門的に考察した研究が存在しているのかどうかについても、何か手がかりがないか調べてみた。しかしながら、井上円了と中国思想との関わり合いについては、円了の伝記的記述に、幼いころの円了が漢学教育を受けたという事実を指摘する以上の記述を見つけることは出来なかった。つまり、円了と中国哲学との関係は、円了研究にとってはまだ未開のテーマなのだとということを実感した。

筆者は、こうした状況を意識しつつ、『円了選集』や井上円了記念学術センターから提供を受けた資料の読解・分析を進め、徐々に円了と中国哲学との関わり、ならびに円了思想における中国哲学の意義について筆者なりの見解を持つに至った。それを一言でいえば、創設期の東京大学という場で生み出された円了の中国哲学関係の一連の論述ならびに、そのある意味での結晶として聳え立つ「読荀子」は、当時の日本における荀子研究だけでなく、第二次世界大戦まで「支那哲学」とよばれた現

在でいう中国哲学という学術領域を開拓した先駆的な論考群であったということである。あえて誤解を恐れずに言えば、円了こそは、彼の先輩であり、師でもあった井上哲次郎とともに、日本近代における「中国哲学」というフィールドの創始者だった。

井上円了の思想的意義について、以上のようなビジョンを持つに至った筆者は、「読荀子」の内容とその思想的意義を総合的に考察していくために、「読荀子」の内容そのものの分析と同時に、円了と中国哲学との関係に関する以上のような仮説を実証する作業も同時に行うことが必要と考え、そのための六段階の作業を設定した。

(1) 円了と中国哲学との関係が重視されなかった現在までの円了研究の問題を整理すること。

(2) 円了が中国哲学に関して書いたものを出来る限り網羅的に把握し、その全体的な特色を理解すること。

(3) 円了と中国哲学との密接な関係が知られる著作のそれぞれの内容を分析すること。

(4) (3)に関連して、特に円了の孔子観と『論語』観、そしてそれらの円了の著述中の位置づけを明らかにすること。

(5) 円了が東京大学時代に受けた中国哲学関係の授業内容と当時円了が出版した論文の内容を比較検討し、円了の中国哲学に関する理解の展開を把握すること。特に明治15年の年末⁽⁷⁾から始まった井上哲次郎の「東洋哲学史」講義の円了の中国哲学観への影響を考察すること。

(6) 「読荀子」の内容と、その円了思想ならびに、当時、黎明期であった中国哲学研究に対する影響と意義を明らかにすること。

本稿は、以上六つの段階的サブテーマのうち、(1)と(2)のサブテーマについて筆者が進めた考察から得られた見解を論述したものであ

る。したがって、遺憾ながら当初の目的あった「読荀子」の分析までには及ばなかったが、それでも従来の円了研究が見逃してきたいくつかの筆者なりの発見があったので、拙いながらも、ここに公にする次第である。なお（3）以下のテーマについては、今後も分析を進め、順次発表していきたいと願っている。

一、「仏教」と「純正哲学」の二項相関的観点で評価されてきた 円了思想の特質

従来、井上円了の思想といえば、「仏教」、「純正哲学」、そして「妖怪学」という三つのカテゴリーで論ぜられてきたように思われる。その学問構成が今日的に言えば「学際的」で、円了が東京大学卒業後に本格的な展開を見せた「妖怪学」をひとまずここでの考察の対象外とすると、過去の明治思想研究者は、円了思想の理論的な核を「仏教」と「純正哲学」を二つの柱とするものと通常見てきたようである。

まず、円了の時代からあまり遠くない評価から見ていくと、三枝博音が昭和10年に発表した「明治時代の日本哲学（其の二）」の「1、観念論的哲学」の説明においては、当時の観念論的哲学者の代表者として井上哲次郎、井上円了、それに清沢満之の三名が挙げられている。三枝によれば、井上円了にとって最も関心のあった主題は仏教思想であったと断定出来るという。三枝は続ける。円了は「しきりに名を哲学に藉りながら宗教の宣伝に努め、その量数十にのぼる著作は、哲学の科学的^{ママ}意気を闡明せんとしたものはないといってよい」のであったと。(8)

一方、戦後の研究を見ると、明治哲学の通史としては、現在でも最初に挙げられるべき船山信一の『明治哲学史研究』では、円了の哲学が著者の分類する五段階の発展における「第二期：観念論と唯物論との分化」の段階の思想家と位置づけられ、そうした流れの中で、「伝統思想への反省」が起こってくると指摘した。船山は続けて、「第二期の特色

たる伝統的思想への反省においても、儒教への反省と仏教への反省とが区別されなければならない。前者を代表するものが西村茂樹（明治20年『日本道德論』）であり、後者を代表するものが井上円了（明治20年・同23年『仏教活論』）である。」と主張した。⁽⁹⁾ 船山は伝統への回帰を儒教と仏教とに区別した上、円了の思想を仏教側のラインにおいたのだと言うことが出来る。

船山の『明治哲学史研究』とともに名著として名高い高坂正顕の『明治思想史』では、円了の思想は、仏教から西洋哲学へ傾斜していく過程として理解されている。高坂は、明治20年に出版された『仏教活論序論』の説明に拠りつつ、「彼はもともと仏家に生まれ、仏門に長じた。しかし大政維新の際、廃仏毀釈の論の盛んであった当時であつては、彼は仏教がむしろ非真理であることを思い、一日も早く仏門を逃れ、世間に出ることを願っていた。」そして、「儒教にも満足できず、西洋哲学において、大いに開眼し、さらにそこから、最も深い真理の萌芽は、かつて非真理であると蔑視していた仏教のなかに存在していたことに気づいた」と言う。しかし円了による華嚴・天台を新ヘーゲル派の思想の比定して理解する観点は、ヘーゲル哲学を「畢竟、唯物と唯心を越えた唯理論と解するに止まった。（強調表記は原文のまま）」とその思想的限界を強調している。⁽¹⁰⁾

比較的最近に出版された末木文美士氏の『明治思想家論——近代日本の思想・再考Ⅰ』では、その第二章を井上円了に割り、そのサブテーマも「純正哲学と仏教」と、円了の主要な思想内容を、やはり西洋哲学と仏教の二大要素に還元して考察している。末木氏の論考は、山崎正一、船山信一、池田英俊などの円了論を踏まえ、明治19年から20年頃における円了の哲学観を中心に、その哲学思想と仏教の関係について論じている。そこで末木氏が注目しているのは、哲学史と論述方式の両方で現れている円了の弁証法的な観点である。まず、円了の哲学観は、哲学

史を踏まえて成り立っており、その中で、西洋哲学と東洋哲学が競争状態にあるようにとらえられており、「西洋学の進化するゆえん、東洋学の退歩せるゆえん」と主張するなど、一種の弁証法的な思想進化論が見られるとしている。また、論述方式に対しては、『哲学一夕話』において、円了は登場人物の議論を弁証法的に展開させ、それによって円了の思想を開陳する効果を挙げている点を指摘している。(11)

以上、明治哲学、思想の代表的な通史の円了部分に関する論点を整理してみたが、筆者がここで取り上げた四氏が円了の思想的特徴を論ずるに当たって、ほとんど自明の前提となっているのは、円了の思想の核が仏教なのかあるいは西洋哲学なのかという二項相関的な問題軸である。この問題軸に沿って、円了の思想が「仏教を軸に西洋哲学を利用した」(三枝)のか、「仏教と西洋哲学の間を往復した」(船山)のか、「仏教と西洋哲学中の似た概念を表面的に結合させただけ」(高坂)なのか、「西洋哲学の方法論で自らの仏教理解を弁証的なものに変えた」(末木)のであったのかといった区別が出てくるのである。確かに高坂が指摘したように、円了が仏教の中にこそ真理が存在すると気づいたのが「是れ実に明治 18 年の事なり。之を余が仏教改良の紀念とす。」(12)だとすれば、それ以降の円了の思想形成が仏教中心に展開したと見なしても、ある種の妥当性があると言えるかもしれない。(13) 逆に溯って考えれば、仏教に対する「学識の乏し(14)」（円了の語）かった明治 18 年以前の円了は、基本的には西洋哲学に関する知識の吸収と理解に全精力を集中させていたとも考えられ、仏教と西洋哲学が両方とも「真理」の問題をめぐる二大軸になるという観点は確立していない。(15)

にもかかわらず、円了が明治 18 年以前に仏教についての著述をしていないのかと言えそうではない。この点については近年、三浦節夫氏がすでに詳細な調査をされており、三浦氏の研究によって円了初期の仏教関係論考の内容のあらましを知ることが出来る。すなわち、円了は東

京大学入学の明治14年10月から、第二学年になった翌15年まで、「主客問答」、「耶蘇教防禦論」、「僧侶教育法」、「宗乱因由」、「宗教篇」という五本の仏教論（および仏教から見たキリスト教論）をつづけて出版している。(16) それぞれの内容と出版等の背景については、三浦氏の論文に詳述されているのでそちらに譲るが、当時の円了が仏教をどのように見ていたのかについて、三浦氏の見解も参考にして整理してみると、当時の円了の仏教論の柱は、(1) 廃仏毀釈によって仏教を衰退させ、また大教院体制によって仏教を政府の管理下に置こうとする明治政府の宗教政策に対する批判、(2) 「固く旧習を守り、頑眠にふけり、依然として数百年前の風情を改めない」僧侶社会側の無能への危機感、(3) これに対して、信徒に感動をあたえらるような品行や、教化方法を持つキリスト教への評価、(4) 「仏教」を「釈教」と呼ぶことによって示される円了の教団への独立的な姿勢、の四点にまとめられる。(17) 確かにこれらの文章には、当時の仏教をめぐる「危機的な」状況に対する政府や仏教界の無能に対する円了の憤慨が現れているが、注意すべきは、これら一連の論考の中では、仏教の理論そのものに対する関心があまり高くないという点であろう。現代的な言い方を借りれば、むしろ円了は科学的方法によって宗教における信仰の必要性を如何に基礎付けるかという問題に注意を向けているように見える。そして、この問題に対する円了の考えは、「主客問答」に現れるやりとりにおけるように、「泰西の哲学にもとずいて真理を証明」する以外に宗教復活の手立てはないというものであった。(18) つまり「主客問答」は、円了の仏教をめぐる国家と僧侶社会への提言という著述形式をとりながら、実は、東京大学の予科で西洋の自然科学の基礎科目のいくつかを学んだ円了が、その理論的基礎、つまり実験的方法と論理を通じて真理に達しようという現在でいういわゆる「科学的」方法の基礎としての哲学を考究したいという決意が表明されている一文であると言える。

ここまで論じてきて、結局、円了思想における「今まで学んできた仏教」と「これから学ぶ西洋哲学」の二項の間の緊張によって発展するという基本的ダイナミズムの基本型が、遅くとも東京大学の入学時点には、すでに固まっていたという、円了思想理解としては、むしろ一般的な説明を確認する結果となってしまった。しかしだからといって、円了思想の理解にとって、中国哲学の占める位置というのは、無視してもよい程度のものなのか？ そうであれば、円了が卒業論文に『荀子』を選んだ原因は、『荀子』を読んだら「活眼」した（円了語）という円了個人の突発的な知的経験に帰さなければならなくなる。(19) 東京大学卒業後まもない明治20年に出版された『仏教活論序論』の記述によれば、仏教に開眼する前の、つまり明治18年以前の円了がその考究に最も力をいれていた対象が西洋哲学であること円了自身が回顧しているので、東京大学時代の円了が意識的に西洋哲学の知識の吸収と理解に研鑽していたことは、おそらく間違いあるまい。しかし、円了の知的遍歴と、その後、円了の西洋哲学、仏教そして中国哲学それぞれに対する価値の軽重において、中国哲学の占めた位置は、一般に認識されているほど低くはないと筆者は考えている。結論を先取するような形で言ってしまうと、円了にとって中国哲学の重要性は、円了が重要と考えている問題について、西洋哲学と仏教の両方によって満たされたい領域を占めていた。特に無意識的な領域では円了の価値観と思考に重要な方向性を与えるような役割があったと考えられる。もちろん、「無意識的」な要素が意識的な理論構成にどの程度の影響を与えたのか、あるいはどの程度の重要性を持っていたのかなどの点を論証するのは難しいかも知れないが、それでも筆者は中国哲学というテーマを専攻している立場から、以下、試みに『円了選集』に収録された著述と、それらには未収録の主に東京大学時代に円了が発表した論文の内容から、円了の中国哲学に対する理解における特徴的な点をまとめ、そこから、円了の思想におけるあ

る一定程度の中国哲学の重要性といったものを確認していくことにしたいと思う。

二、円了の中国哲学に関する著述概観

本稿の後半では、以下円了がその生涯に発表した中国哲学に関する論考を主に東京大学時代とその後に分類して整理し、円了思想における中国哲学の役割について、初歩的ではあるが筆者が気づいたことを述べてみたい。なるほど、確認されたもので182冊の単行本と講義録、それに850篇を越える論文や随筆などの大量の著述をしている円了にとって、中国哲学の占める割合は、分量的には極めて小さいことは否定できない。基本的に円了が中国哲学に関連して著述したものは、東京大学時代の学術論文の形か、概説書における「支那哲学」等の項目における論述に限定される。しかし、その中で唯一単行本として出版されたものとして、明治26年に出版された『忠孝活論』がある。ただ、その内容の基本的な特質を中国哲学的なもの、ないしはもっと具体的に儒教的なトピックで書かれた著述と見なすか、それとも、より広い倫理的な著述と見なすかについては、読む人によって意見が分かれるようである。例を挙げれば、『円了選集』の編者は、基本的に後者の立場を採用しているようである。もし『忠孝活論』を中国哲学関係から除くと、基本的に円了が中国哲学を主題にした専著は、筆者が知る限り一冊もなくなり、そうすると東京大学時代の一連の論文と、純正哲学、倫理学関係における「支那哲学」関係の概説的叙述と中後期の著作に散見する修身関連の徳目解説に現れる程度となる。円了の著述の中で、中国哲学の存在が小さく見える第一の原因である。

しかし、円了と中国哲学との関連が小さく見える原因は、著述の数が少ないという物理的な要因からのみもたらされるのではない。そこには人為的な要因もある。それは『円了選集』の編集者が、東京大学時代の一

連の論考の大部分を『円了選集』に採録しなかったという事実である。現在、円了研究を始めるための最重要文献である『円了選集』の編者は、円了が中国思想をテーマに専門的に議論した論文の六篇のうち四篇の採録を見送ってしまい、しかも収録した二篇も、最終巻の最後に「付け加える」というような措置をとったのである。したがって『円了選集』に依拠して、円了と中国哲学との関係を見ようとしても、上記の『忠孝活論』と大正6年に出版された『奮闘哲学』にどこか一種の儒教臭さを感じられる以外は、円了と中国哲学との間には仏教や西洋哲学との間におけるような意識的なつながりはほとんど読み取ることが出来ない。

しかしながら、卑見によれば、円了の東京大学時代の中国哲学に関する論文を一連のものとして把握し、その理解を基点に円了の思想の展開をたどれば、大正2年に出版された『哲学一瞥』に記述されている「四聖」の一人としての円了の孔子観や『論語』観、あるいは『忠孝活論』と『奮闘哲学』における円了の儒教的価値観などについて、『円了選集』のアレンジに依拠するものとは、まったく異なる円了の中国哲学観、つまり円了思想の中における中国哲学の占める割合の大きさが見えてくるのである。

それでは、円了が中国哲学に関連してどのような記述をしたのかを具体的に見ていくことにする。『井上円了関係文献年表』をなぞって、円了が中国哲学分野のある思想、価値概念（つまり儒教でいう「仁」などの徳目）や、中国哲学に関連する人物をテーマに書いた文章をピックアップしていくと以下ようになる。

井上円了の中国哲学関係著述一覧

出版時期	題名	出版書名・学術誌名
明治 15 年	堯舜は孔教の偶像なるゆえんを論ず	東洋学芸雑誌
明治 16 年	黄石公は鬼物にあらず又隠君子にあらざるを論ず	東洋学芸雑誌
明治 17 年	排孟論	東洋学芸雑誌
明治 18 年	読荀子	学芸志林
明治 18 年	孟子論法を知らず	東洋学芸雑誌
明治 19 年	易を論ず	学芸志林
明治 19 年	支那哲学(20)	哲学要領
明治 20 年(21)	第 14 章：孔孟の修身学は仮定憶測に出ずること 第 15 章：孔孟の修身学は論理の規則に合格せざること 第 16 章：老荘の道德説は実際に適せざること	倫理通論 第一編： 倫理緒論
明治 20 年	第 109 章：孔孟の説 第 110 章：老荘の説 第 111 章：楊墨の説 第 112 章：荀揚の説 第 113 章：宋儒の説	倫理通論 第七編： 各家異説・第一
明治 24 年	孔孟の教是より興らん	天則
明治 25 年－ 26 年	シナ哲学	純正哲学講義「東洋哲学」
明治 26 年	忠孝活論	
明治 28 年	易論（「易を論ず」の改正版）	東洋哲学
明治 37 年－ 39 年	「義勇」「忠節」「礼儀」「信義」「誠心」「孝道」「友道」「恭敬」を執筆	修身会雑誌
明治 38 年	儒教本尊説	東洋哲学 12 - 11
大正 2 年	孔聖（孔子）	哲窓一瞥
大正 2 年	莊子	哲窓一瞥
大正 2 年	朱子	哲窓一瞥
大正 2 年	儒学を修めざるべからず	哲窓茶話(22)
大正 2 年	利己利他教(23)	哲窓茶話

大正2年	五行記	哲窓茶話
大正2年	相生相剋	哲窓茶話
大正2年	シナの神(24)	哲窓茶話
大正2年	「孝行」および「正直と孝行」	哲窓茶話
大正6年	東洋哲学の真相	奮闘哲学(25) 第一講：哲学観
大正6年	東洋と忠孝	奮闘哲学 第四講：国家観
大正6年	国民道徳訓(26)	奮闘哲学 第四講：国家観
大正6年	奮闘の原動力	奮闘哲学 第五講：社会観

まず、円了の東京大学時代における中国思想関連の著述をみると、明治15年、円了第二学年時に発表された「堯舜は孔教の偶像なるゆえんを論ず」に始まり、「黄石公は鬼物にあらざ又隠君子にあらざるを論ず」、「排孟論」、「読荀子」、「孟子論法を知らず」、と続き、卒業後もない明治19年に発表した「易を論ず」の合計六本に達する。そのうち『円了選集』に収録されたのは「堯舜は孔教の偶像なるゆえんを論ず」と「読荀子」である。それと対照に収録されていないものを見ると、中国思想史上、荀子としばしばペアで議論される『孟子』に関する二つの論考や、円了の本体論思想形成を理解する上での重要な「易を論ず」を漏らしたことは、この『円了選集』の瑕疵といえないこともない。(27)

まず、『孟子』に対する二つの論考：「排孟論」と「孟子論法を知らず」であるが、周知のように、孟子は儒学では「亜聖」と称され、特に朱子学や陽明学において崇尊された。円了はこの二つの論考で、孟子の論述方法の不備を細かく分析した。確かに、円了の著述における孟子への態度は、「哲学四聖」の一人に据えた孔子と比べるとかなり淡泊である。しかしながら、東京大学時代の円了が、孟子をテーマで二回も論文

を書いたということは、それだけ円了がこのテーマを重視したという証拠にならないだろうか？また、儒学史であれば通常、孔子、孟子と分析が進めば、必然的に次は荀子が対象になる。円了が荀子を考察の対象に選んだ際も、孟子に対するのと同じように、その議論の立て方などを批判するつもりで取りかかったのが、読んでみたら、かえってその内容に「活眼」してしまって、卒業論文のテーマとなったのかもしれない。そうしたプロセスを誘発した可能性を示唆する意味でも、円了の孟子に関する二つの論考の存在を軽視すべきではない。

円了の東京大学時代の著作として、筆者がさら重要だと考えているのは「易を論ず」である。⁽²⁸⁾ この論文は「易」哲学の本体論の意義を西洋哲学の形而上学関係の著作との比較によって論じたもので、円了がその翌年から出版を始めた『哲学一夕話』に出てくる究極的本体を示す「円了」という概念や、『哲学要領』（後編）にあらわれる「純化論」の形成など、円了の宇宙論の展開を促した重要な論考であると考えられる。また、上述した『忠孝活論』のいわゆる「開発論」部分の議論のアイデアも、ほとんどこの一文に尽くされており、円了研究者がもっと注目してよい作品である。さらに補足すれば、円了は「易を論ず」をその内容を若干訂正した上で、「易論」と銘打って、再度『東洋哲学』から発表している。円了が十年近く間を置いて二度も発表したという事実も、東京大学時代に『孟子』に対する一種の入れ込みと同じように、やはり円了が『易経』に対してある種の思入れを持っていたことを示すものではないだろうか。⁽²⁹⁾ その点からも、『円了選集』の編者は、少なくとも「易を論ず」か「易論」のどちらかを『円了選集』に収録すべきであった。

東京大学時代の一連の中国哲学の関係の諸論文の他にも、『円了選集』の収録にもれたものの中で注意すべきものとしては、上述の明治 28 年に発表された「易論」や明治 38 年に発表された「儒教本尊説」がある。

次に、円了の東京大学時代の著述の性格をみてみよう。東京大学時代の円了の著作テーマは、主に中国思想関係と仏教関係に二分される。三浦節夫氏がすでに指摘しているように、そのうち仏教関係の論考は、すべて教団向けの新聞や雑誌、つまり一般の読者向けに発表されている。それらの内容は、東京大学入学以前から円了が抱いていたどちらかといえば時事的、評論的な問題意識を引きずっている傾向が顕著である。それとは対照的に、中国哲学関連の論文は、円了が東京大学入学後、授業などからの刺激を受けて執筆されたと想像され(30)、発表媒体も当時日本のトップのインテリ達が読者であった『学芸志林』と『東洋学芸雑誌』の二種類の総合(つまり現在でいう理系の論考も含んでいる意味で)学術誌である。なお、円了の著述の中で中国関係以外で、この二誌に収録された論文は、円了が明治16年に発表した「読日本外史」があるのみである。

ちなみに西洋哲学に関する著述を見れば、のち『哲学要領』になる原稿類は、明治17年から19年にかけて出版されているが、これらも、仏教関係者を中心とする一般向けの『知令会雑誌』よりの発表である。したがって、東京大学時代に発表された著述において、当時の円了が思考ならびに著述していた学術的フレームワークやテーマは、基本的に中国哲学に関するものであったと言える。

このように、西洋哲学の吸収と理解に邁進していたはずのこの時期の円了がなぜ西洋哲学に関する論考を総合学術誌から一本も発表せず、ひたすら中国哲学関係の論考を発表し続けたのか。筆者にはこの事実の存在自体が当時の円了における中国哲学のある特殊な重要性を示唆するように思われる。ここでさらに指摘したい点は、円了の中国哲学に関する論文を順を追って読むことによって理解される円了の哲学的思索の展開である。円了の中国哲学に関する論考は、前述のとおり「堯舜は孔教の偶像なるゆえんを論ず」に始まるが、この論文は中国哲学の「偶像観」

への一種の宗教学的な関心から執筆されたものである。この作品を基点として、円了は思想、歴史そして宗教を哲学的観点でとらえ始め、道徳的言説を論理的に叙述する必要を説いた「排孟論」、荀子の一種の科学的世界観に注目した卒業論文である「読荀子」を経て、中国哲学における本体論を論じた「易を論ず」まで、中国哲学に関する論考を連続して出版している。それら全体を初期円了の比較哲学に対する理論探索と見なせば、それらの著作が、円了思想の展開の中で、お互いに必要不可欠な要素を形成しつつ、円了の思想形成に重要な役割を担っていた可能性を見出すことが出来る。つまり東京大学時代の円了が、仏教でもなく、西洋哲学でもなく、中国哲学の分野で一連の論考を発表していった背景には、中国哲学というテーマだったからこそ可能であった思索のプロセスがあったはずであり、それらをひとつにつなげて比較考察すると、個別に見れば、それぞれ単独のテーマを扱っているように見えても、明治20年頃における円了哲学の確立への過程と見れば、それらの論文の思索と執筆のプロセスが一つとなって円了思想展開のダイナミズムを示しているのである。

そうした観点に立つと、『円了選集』がそれら諸論文に現れた円了の思想を連続する思索の発展的ダイナミズムとしてとらえず、ただ「初期論考」という執筆時期を示すカテゴリーにくくってしまい、そのなかの半分以上の作品の収録を見送ったことは、それぞれの論文を散発的なテーマに関する論考以上の意義を見出すのを困難にしてしまったという意味で、遺憾なる措置と指摘せざるを得ない。したがって、『井上円了関係文献年表』を同時に参考出来ない読者にとっては、最初に『円了選集』に接する際、東京大学時代の円了が中国哲学を一連のテーマとしてその思想を展開させていた可能性を想像することが出来ない。筆者の個人的な観点では、東京大学時代の『学芸志林』と『東洋学芸雑誌』に載った全部の論考を年代順に配列したものと、ほぼ完全に残っている円

了による井上哲次郎の「東洋哲学史」ノートを活字にしたもの、それに「儒教本尊説」など、円了中後期の中国哲学理解を示す論考の中で『選集』に収録されていないものを一まとめにして提供する必要があると思われる。今後の円了研究への提言として記しておく。

本論に戻ろう。円了は上記した主題別の論考以外にも、中国哲学について著述したものがある。それは明治17年9月に『知令会雑誌』から出版され、のち明治19年に『哲学要領』に収録された「支那哲学」項における記述である。これらは、中国哲学史への総合的理解をまとめた論述で、後述するように、このような円了の中国哲学に対する通史的理解は、のちの円了の幾つかの著作に登場する。井上哲次郎の「東洋哲学史」の講義内容を踏襲したものと考えられるが、哲次郎研究者の間では周知のごとく、この「東洋哲学史」の講義内容は、終生出版されることがなかったので、円了によるこの「支那哲学」の項は、日本で西洋哲学の受容後に出版された中国哲学史に関する最初の通史的記述となった。筆者が序論で哲次郎と円了を中国哲学という学術分野の創始者と見なした理由の一つである。

では次に、東京大学卒業後における円了の中国哲学関係の著述を見ておこう。ここでは便宜的に四つカテゴリーに分けて説明する。まず第一類は円了が執筆した哲学史、あるいは倫理史などの通史の中におけるいわゆる「支那哲学」部分の論述である。先にちょうど述べたように、円了は、明治19年に『哲学要領』に収録された「支那哲学」の項の理解のラインにそって、明治20年の『倫理通論』における「第一編：倫理緒論ならびに倫理通論」および「第七編：各家異説・第一」、さらに明治25年から26年に出版された『純正哲学講義』でも「シナ哲学」項を執筆している。これら一連の通史的記述では、西洋哲学との比較をつうじて「真理」への接近度を基準に、孔子の思想も含め、中国哲学の意義を限定的に認める態度が特徴的で、仏教（インド哲学）、西洋哲学、

それに中国哲学の三者を総合的に評価しようという円了の思想的姿勢が面目躍如としている。周知のように、円了がこれらの比較哲学の総合的な著述をしたこの時期の大部分において、もう一人のパイオニアである井上哲次郎がヨーロッパ滞在中であることを考慮に入れるならば、明治20年代前半に、円了のこうした著述がいわゆる「東洋哲学」という学術分野の形成に果たした貢献は極めて大きいものがあるとしなければならない。

第二類は、中国哲学に対する総合的評価態度とは対照的な円了の「聖賢論」に現れた中国哲学観である。円了は「四聖の夢中に現ぜしは、余が明治18年、古今東西の哲学者中より四人の聖賢を選定して、その図を画工に作らせしめ、哲学祭を設けしことあり、その四人とはシナ哲学にて孔子、インド哲学にて釈迦、ギリシア哲学にてソクラテス、近世哲学にてカントこれなり。」⁽³¹⁾と後年回顧したように、東京大学在学中には、すでに孔子を「哲界四聖」の一人に位置づけていた。⁽³²⁾「哲学四聖」の一人としての円了の孔子観については、円了が哲学堂を運営する抱負をまとめた「哲界一瞥」(ただし出版はかなりのちの大正2年)の中にその描写がある。ここでは、釈迦が「釈尊」と呼ばれているのに対応して、孔子も「孔聖」と呼ばれている。⁽³³⁾なお哲学堂には孔子の他に中国哲学から荘子と朱子が「六賢」に加えられているので「哲界一瞥」には、その両賢の紹介も添えられている。⁽³⁴⁾また「哲窓茶話」におさめられている「利己利他教」という一文の実際の内容は孔子論、というよりも孔子思想の意義を賛美した文章であり、このカテゴリーに属するとみてよからう。⁽³⁵⁾

第三類は修身に関連した用語の解説が中心である。円了は明治39年にその修身教会運動の中心活動としての全国巡講を開始するが、円了はその準備時期にあたる明治37年から39年まで(円了47歳から49歳)の三年間の間に発行された『修身会雑誌』において、「礼儀」、「信義」、

「誠心」など儒教の徳目を解説している。(36) さらに円了の晩年、哲学堂にて行われた講話を集めて出版した『奮闘哲学』の「国民道德訓」には「忠節」、「礼儀」、「信義」、「一誠」など、儒学徳目を宣揚する記述も多く、他の章などでは「忠孝」についてもしばしば語られている。しかし、『奮闘哲学』全体で見た場合、この時期の円了の中国哲学観を示す重要な例は、おそらく「誠」概念の重視といっても過言ではなかろう。「誠」概念は、『礼記』『中庸』篇の後半の主題となっている徳目で、朱子が「中庸」篇を「四書」の一冊に入れたのも、朱子が「誠」をことのほか重視したからという意味でも、儒教においてある種の特殊な地位を持つ徳目である。徳川時代に儒学思想が本格的に日本に導入されて後、日本の儒者達の朱子学に対するに賛否を問わず、「誠」概念は朱子学のみならず、日本の儒学においても、最も重視される徳目の一つとなった。円了の「誠」論の特徴については、第四類において説明する。

そのほかの記述に目を向けると、明治24年に『天則』から出版された「孔孟の教はより興らん」(37)は、孔子の思想はその実践的なところに意味があり、『論語』に見える各種の人生訓は、現代に至っても十分価値のあることを主張した一文で、円了の修身論と孔子観の媒介をなしている。

第四類は、東京大学時代の問題意識の延長か、あるいはその時々中国哲学関連テーマに関する興味から書かれたものである。そこには、「哲窓茶話」に収録された「五行記」、「相生相剋」などいわゆる「五行思想」についての解説を記した軽い内容のものもあるが(38)、以下の三作品は、東京大学卒業後の円了の中国哲学論として注目すべきものである。

(1)『忠孝活論』(明治26年)：『円了選集』の選者は、この著書を円了の倫理学の一環として、明治23年に公布された「教育勅語」に関連させて、『倫理通論』等と一緒にして『円了選集』第11巻に収録しているが、選者諸氏も、この著作への扱いには手を焼いたと見えて、第

11 卷の第一解説者である田島孝氏と第三解説者の中村哲也氏の解説では、この著作についての言及はない。そして、第二解説者の末木剛博氏の解説でも、『忠孝活論』に対しては、その内容をそのまま要約しただけで（末木氏が自分の言葉で解説しているのは、附録の「仏門忠孝論一斑」である）、『忠孝活論』の解説としてほとんど体をなしていない。⁽³⁹⁾ この著作の構成上の特徴は、前半部分を占める「開発論」が、西洋および仏教哲学との比較において記述されているという点で、このような観点は円了初期の著作「易を論ず」を踏襲している。またこの論文は、内容的にも「易を論ず」に通ずる中国哲学の生成論を基礎に論述されており、それに比べると西洋哲学や仏教は比較的観点の提供という脇役的な役割を担っているに過ぎない。円了は、その「開発論」を日本人の「忠孝」観念の形而上学的基礎ととらえるのだが、その特徴は、日本人の「忠孝」観を易の生成論と朱子学の「理気論」と結びつけて理解した点と、「忠孝」概念そのものを、『礼記』『中庸』篇後半の主題である「誠」概念の枠で、そのダイナミズムを把握した点にある。そもそも中国古代思想において、「誠」は「仁」と並ぶ帝王の徳の一つで、「誠」の心を持つ為政者は、その「誠」の心を、気が拡充するように人民の心に及ぼし、人民の心を徳化し、刑政を用いなくても、心の通い合いによって、人民を服従させることが出来るとされる。⁽⁴⁰⁾ 円了の「誠」概念は、朱子学の修身論における「誠」概念も経ているので、必ずしも君徳として説かれているわけではなく、むしろ修養論の根源的価値といった位置づけがなされているようであるが、少なくとも、「中庸」篇を「哲学祭」に供えるテキストの一つに選び、その原文もほとんど暗記していたに違いない円了の「誠」概念は、そのオリジナルのテキストからかもし出される中国古代の「誠」概念の特徴についても直感的に把握していたと、筆者は考える。そこに展開される「誠」概念は、一種の真心が「気」に乗っかって、その徳が個人から全体に及ぶというような拡充のダイナミ

ズムを持っているものであり、末木氏の解説に言うように単に朱子の「理気論」を取って付けただけのものではない。

(2)「儒教本尊論」(明治38年に『東洋哲学』から出版)。この論文は明治15年に出版された「堯舜は孔教の偶像なるゆえんを論ず」の問題意識を継ぐ形で、孔子の思想が、「天道」や「性」を含んだ思想を展開していたのに対して、孟子になると、その関心が人間世界に向けられることになったという、円了の中国哲学史における「天人関係論」を示したものの。

(3)「儒学を修めざるべからず」(「哲窓茶話」に収録)。(41) この講話における円了の説明によると、儒学は、外来の西学とは違って、日本の歴史に固有し、「人心」と「国体」の保持を可能とするという意味において、日本の興隆に不可欠な一種の国学であるという。つまりここで円了は儒学の意義を全面的に宣揚している。一般に円了の思想論は「真理」という秤にかけて、その得失を同時に述べるスタイルが一般的であり、ある思想を一方的に賛美するというのは、どちらかと言えば円了らしい論述態度ではない。「哲窓茶話」冒頭にある円了自身の序文によれば、ここに収められた講話は、佐村八郎なる者の筆録であるという。したがって、記録者である佐村の脳裏には儒教は大変重要だとの先入観があったため、円了が講話中に儒学のデメリットや問題点を指摘したとしても、それらを聞き漏らしたか、あるいは故意その部分を筆記しなかった可能性も否定できない。しかしながらその一方で、『奮闘哲学』の内容に見られるように、修養と、その実践による理想的な国家・社会の実現を強調する晩年の円了の著述においては、儒教における実践道德の重要性が、いわゆる円了思想の核を構成しているとされる西洋哲学の真理観や仏教的本体論への志向を凌駕してしまっている観もあり、晩年の円了における「儒教的価値への回帰」という現象の一環と捉えられるのかもしれない。これらの点についての考察は今後の課題としたい。

おわりに

井上円了にとって中国哲学とは何だったのか？それは、西洋哲学や仏教のような、円了思想にとって不可欠な一席を占めることが出来るほどのものだったのだろうか？本稿では、これらの問題に直接の回答を探す代わりに、迂回ながらも、まず円了の中国哲学に関する関係論説を拾い集めてそれを整理するという基礎作業を行ってみた。具体的には、(1) 過去の井上円了思想研究が円了の思想的意義を「西洋哲学」—「仏教」の二項的な枠の中でのみ議論してきた状況を批判的に整理・紹介すること。(2) 近年における円了初期思想への関心も踏まえ、その初期において中心的な著述群を構成していた中国哲学関係の著作に注目しつつ、『円了選集』や、それに収録されていないものも含め、円了の中国哲学に関する論考も出来る限り収集して、それらの内容を総合的に紹介すること。そして(3) 円了の中国哲学に関する著述を東京大学時代とそれ以降のものに分類し、それぞれの著述内容の思想的特色を探ること、の作業が中心となった。これらの作業は、円了思想における中国哲学の役割を探索するための土台づくりに留まるが、それでも一応若干の知見を得ることが出来たので、最後にそれらを四点にまとめて本稿の結びとしたい。

まず第一に、本稿は円了の東京大学時代の思想展開における中国哲学の重要性を確認した。個別的な観点と総合的な観点からそれぞれ、円了初期の著述における中国哲学の重要性を指摘すると、個別的には、まず『孟子』について、円了は二度も論文を発表した。また、『荀子』は言うまでもなく卒業論文の主題になった。さらに、過去、円了研究者からほとんど取り上げられることのなかった円了の『易経』に対する分析も、円了の形而上学の確立に大きく作用したと考えられる。つまり、円了初期の中国哲学に関する論考はどれも少なくともその時々円了思想にとって、重要な意義が認められるだけの理由がある。さらに、それら

が、東京大学在学中から卒業直後までという4年間の間に連続して発表されたという事実も見逃してはならない。なぜなら、それらが連続して書かれたという事実は、円了が中国哲学に関連した一連の著述をすることによって、哲学というディシプリンそのものへの理解を深めていったプロセスを示しているともいえるからである。具体的な分析は、筆者の次なる課題としておきたいが⁽⁴²⁾、少なくとも今後の円了研究、特に初期思想に注目した研究は、これら中国哲学に関する論考を、円了思想の一連の展開として、あるいはダイナミズムとして総合的にとらえる視角を持つことが必要になるのでないかという点を指摘したい。

第二に、円了全体の著述に垣間見られる特徴であるが、円了は孔子と『論語』の価値について、円了個人が意識している以上に相当傾倒していたのではないかと思われるフシがある。円了は孔子の哲学の価値を「徳目の実践」という内容で把握し、そうした把握自体は、円了の一生を通じてほぼ変わらなかったと考えられるが、特にその晩年、円了は修身運動を推進して行くにしたがって、道徳の実践者としての孔子の「偉大性」に対しては、ある意味では、釈迦やカント以上に傾倒していたのではないか。

第三に、円了思想における『礼記』『中庸』篇の「誠」概念への傾斜も、晩年になるにしたがって顕著になって行ったようである。円了の「誠」概念は、それがただ単に、朱子学で重んじられていたという意味を超え、「中庸」篇本来が持つ中国古代の「誠」概念における「気」の拡充とパラレルな関係にある「道徳的心理」の拡充というダイナミズムをも含み、『易経』の生成論への理解と融合して、円了独自の「形而上学的修身説」の一つキータームとなっているようである。⁽⁴³⁾

そして第四点として、円了の中国哲学の研究から導き出された儒学的実践的価値は、真理を追究する手段としての西洋哲学と仏教思想とは分業的に共存しているという状況を指摘したい。円了の頭の中では、中国

哲学と西洋・仏教哲学は、それぞれ異なった役割を担っているので、われわれ研究者が円了の著述における西洋哲学や仏教関係の論述だけをおさえても、それだけの考察では、中国哲学の重要性が見えてこない。当たり前のことかもしれないが、円了が儒教的価値を重視したという状況を理解するには、円了が儒教や中国哲学について書いたものを読むのが最上の方法だと言える。円了思想全体において中国哲学に担わされている「実践倫理」の重要性も、そうした諸点を踏まえた円了の著述に対する比較的考察から浮かび上がってこよう。そのような意味においても、現在の『円了選集』を補充する形で、円了の東京大学時代の中国思想関係の全論文と『円了選集』からもれた中国哲学関係の論考類を合わせて出版し、その全体を見渡せるようにすることが、今後、円了思想研究の新局面を開拓する上でも重要な作業になるだろう。

最後に、円了との中国哲学の関係というテーマは、円了思想の基本的性格の理解を左右する重要なものでありながら、まだほとんど手付かずの状態である。本稿では円了の著作の中で中国哲学関係の著述を一つ一つ探し出し、それを整理・分類するという基礎作業を行ってみたが、筆者の観点もまだまだ初歩的なものに過ぎないので、次稿では、それら一つ一つの論旨や思想的特徴を詳細に分析した上で、円了の中国哲学に対する理解をより具体的に明らかにしたいと願っている。読者諸賢のご批評を乞う次第である。

後記：本稿の作成に当たっては、東洋大学の関係者諸氏に多大な助力を賜った。まず、筆者が利用した台湾大学図書館所蔵の資料のうち、最も重要な『井上円了選集』と『井上円了関係文献年表』は共に東洋大学井上円了記念学術センターから寄贈されたものである。また筆者が同センターを訪問して調査を行った際、同センターの三浦節夫氏より懇切なるご教示と『円了選集』には収録されていない貴重な資

料のコピーの提供を受けた。さらに同記念博物館の栗原晴夫氏からは、展示室に陳列してあった円了の直筆ノートの荀子部分のカラーコピーを台湾まで郵送していただくという望外な厚意を受けた。心よりの謝意を表したい。また本稿は、台湾国家科学委員会の研究助成（NSC100-2410-H-002-106）による研究成果の一部である。

- (1) 三浦節夫：「井上円了の初期思想（その1）：真理金針以前」（『井上円了センター年報』、16巻、2007年、50頁）。
- (2) 「支那哲学史」と銘打った総合的な通史や、本格的な中国哲学と西洋哲学の比較をテーマに扱った著作が、堰を切ったように大量に出版されるのは、明治30年代になってからである。
- (3) 「読荀子」というタイトルは、日本の本格的な荀子注釈の嚆矢となった荻生徂徠の『読荀子』と全く同じである。明治・大正期の日本の『荀子』研究者は、徂徠の『読荀子』がその後の日本における『荀子』注釈の興隆に大きな影響を及ぼしたことをよく認識していた。徂徠『読荀子』の「発見」、出版のプロセス、内容、そして思想的意義については、北田数一：『荻生徂徠讀荀子解題敘説』（東京：審美書院、1941年）に詳しい。
- (4) 通常「中国思想」あるいは「中国哲学」という用語は、中国で発展した仏教思想も加えた名称だが、本稿では仏教はひとまず「仏教」として区別し、中国古代に発展した儒学や諸子百家思想、そしてその漢代以降の継承である経学を主要な範囲とする。
- (5) 詳細については、佐藤将之：「漢學與哲學之邂逅：明治時期日本學者之《荀子》研究」（『漢學研究集刊』、第3集、2006年、153-182頁）を参照されたい。
- (6) 針生氏は、2006年11月20・21日に台湾の淡江大学において開催された「台湾・日本・韓国哲学国際学術会議」というシンポジウムに参加され、「近代日本において果たした哲学者の役割——井上円了の場合」という題目で報告された。
- (7) 『巽軒年譜』（『井上哲次郎集』第8巻、東京：クレス出版、2003年、74頁）によれば、井上哲次郎の「東洋哲学史」の講義は明治16年に始まったとされるが、円了による同科目の筆記ノートには、第五講が1月11日と記されており、講義の日付は以下一週間ごとに進む。したがって、哲次郎が前年の12月から「東洋哲学史」の講義を始めていたことは確実である。つまり、円了の筆記ノートは『巽軒年譜』の記述

の誤りを正す上でも貴重である。

- (8) 三枝博音：「明治時代の日本哲学（其の二）」（『明治哲学思想集』に収録、東京：筑摩書房、1974年）、384頁。（初版は1935年）
- (9) 船山信一：『明治哲学史研究』（東京：こぶし書房、1999年）、32頁。（初版は1959年）
- (10) 高坂正顕：『明治思想史』（京都：燈影者、1999年）、269-270頁。その一方で、小林忠秀氏が、「知の論理学」あるいは、世界理解のロギスとしての純粹哲学をくぐった「天台家の説」によって唱えられた「相即の論理」が一見するところ相対立する事物を相互依存、あるいは相互内包という関連性のもとに包摂し、世界をもっとも妥当に根拠づけることの出来る方法だったと積極的に理解している見解も挙げておく。小林忠秀：「井上円了の『哲学』」（高木宏夫編：『井上円了の思想と行動』に収録、東京：東洋大学、1987年）、38頁。
- (11) 末木文美士：『明治思想家論——近代日本の思想・再考Ⅰ』（東京：トランスビュー、2004年）、43-61頁。なお、末木氏は、円了の章を、通常彼の師とされる井上哲次郎の章の前に置くことで、円了思想の基本的なスタンスが、明治20年頃には、つまり哲次郎のドイツからの帰国に先立って、ほぼ固まっていた可能性を示唆している。
- (12) 「仏教活論序論」、『円了選集』第3巻、337頁。
- (13) ただし、その場合でも「仏教活論序論」における、円了の根本的問題意識は、やはり西洋哲学におけるような「真理」が仏教に存在するかどうかには注がれているように考えられ、仏教独自の思想や主張を開陳するという面は希薄である。
- (14) 「仏教活論序論」、337頁。
- (15) 円了が、東京大学在学中に受けた仏教関係の講義をみると、明治16年－17年の第三学年における「印度哲学」で、原坦山による『輔教編』、『大乘起信論』と吉谷覺寿による『八宗綱要』をそれぞれ受講し、明治17年－18年の第四学年における「印度哲学」では、原坦山による『大乘起信論』と『維摩経』、吉谷覺寿による『天台四教儀』の講読をそれぞれ受講している。
- (16) 三浦節夫：「井上円了の初期思想（その1）：真理金針以前」、51-56頁。
- (17) 三浦節夫：「井上円了の初期思想（その1）：真理金針以前」、73-76頁。
- (18) 「主客問答」、『円了選集』第25巻、672-690頁。
- (19) 「仏教活論」や「忠孝活論」など著作名に現れる「活論」という題名においてもそうであるが、円了の著作には、「活眼」、「活書」などの術語

が大量に現れる。円了は、その著作を通じて、「活」という字に対し、極めて重要な意義を付与しており、円了の価値観を知るキーワードの一つになっている。

- (20) 三浦節夫氏の整理によれば、この部分は『令知会雑誌』の第6号（明治17年9月30日発行）から出されたものを収録したもので、明治17年9月には出版されていた。ただ、単行本になる際、第五節「利害」が削除されている。三浦節夫：「井上円了の初期思想（その2）：東京大学時代の軌跡」（『井上円了センター年報』、16巻、2007年）、104頁。
- (21) 序文によれば本書は明治19年12月には完成しているから、著述時期から言えば明治19年の作品と見てよい。
- (22) 明治38年以前の講話を集めたものとされる。
- (23) 実際の内容は孔子論。
- (24) 実際の内容は、中国思想における死生観。
- (25) 『奮闘哲学』には、かなりの量の中国古典からの引用、それにそれらをもじった表現、さらに儒学的概念に対する標語が含まれている。
- (26) 「忠節」、「礼儀」、「信義」、「一誠」等、儒学徳目の宣揚する記述多し。
- (27) 第一線の円了研究者である三浦節夫氏は、「円了の初期思想の形成は東京大学入学からはじまり、在学中の哲学などの研究、それにもとづく思索や著作によって、大きく発展する。」と指摘されている。後半の一文の「など」を「および中国哲学」とすれば、「それにもとづく思索や著作によって」円了の思想の発展が促されたとすれば、円了思想の発展的理解のためには、この時期の著作を除くべきではなかっただろう。三浦節夫：「井上円了の初期思想（その2）：東京大学時代の軌跡」（『井上円了センター年報』、16巻、2007年）116頁。
- (28) ここで言う「易」は、『易経』に注釈として加えられ、その哲学的基盤を闡述した『繫辞伝』などのいわゆる「十翼」の内容を含む。
- (29) 『易経』は哲学祭の折、「四聖」の前に供えられた八部の著作の一つでもあった。
- (30) 井上哲次郎の「東洋哲学史」（円了的の第二学年）、島田重礼の「支那哲学」（第三学年および第四学年）、中村正直の「漢文学」（第四学年）などの講義との関係が推測されるが、まだ全部の講義ノートを見たわけではないので、詳細については今後の課題としたい。
- (31) 「星界想遊記・題言」、『円了選集』第24巻、25頁。なお、その前の24頁には、円了が明治18年画工に描かせた四聖に中村正直が「賛」を加えた口絵の裏に「賛」の現代語訳が添えられているが、その第七

連の「炳燭餘光嗟我老矣」を「かがやくともし火のあまりの光にわが老いたるを歎き」と訳している。しかし、ここで正直が吟じた「炳燭餘光」というのは、「使い切る直前の蠟燭の餘光」を正直本人の「残り少ない人生」の比喩として描写したものと解釈されるので、「餘光」を程度の強い「あまりの」という意味に訳すのは誤訳で、「残り少ない蠟燭の余光に自分の老いをつくづく実感し、…」と文字通り「余った光」という意味で解釈するのがよいだろう。

- (32) なお祭文そのものは、『円了選集』第2巻収録の「哲窓茶話」の「四聖を祭る文」(110-111頁)を参照。
- (33) 「哲界一瞥」、『円了選集』第2巻、74-75頁。
- (34) 「哲界一瞥」、『円了選集』第2巻、80-81頁。
- (35) 「哲窓茶話」、『円了選集』第2巻、105-106頁。なお「哲窓茶話」は、大正2年の出版であるが、明治37年以前の円了の談話を記録した可能性が大きいと言う。小林忠秀：「解説」、『円了選集』第2巻、474頁。
- (36) 「哲窓茶話」にも「孝行」や「正直」など、儒学の修身徳目に関したトピックを取り上げている。『円了選集』第2巻、147頁および150頁。
- (37) のち「甫水論集」(明治35年出版)に収録。『円了選集』第25巻、71-80頁。
- (38) 「哲窓茶話」、『円了選集』第2巻、188-193頁。
- (39) 田島、末木、中村三氏の解説は『円了選集』第11巻のそれぞれ487 - 504頁、505 - 531頁、および533 - 547頁を参照。
- (40) 中国古代の「誠」の概念の展開とその思想的意義について、筆者はいくつかの論考を発表している。ここでは、そのうち日本語に翻訳されて出版された拙稿だけ挙げておく。佐藤将之：「変化を掌握する道徳——『荀子』における「誠」概念の構造」(佐藤鍊太郎、鄭吉雄編：『中国古典の解釈と分析』(札幌：北海道大学出版会、2012年)、255-279頁。
- (41) 「哲窓茶話」、『円了選集』第2巻、101頁。
- (42) 参考のために、筆者の初歩的な観察を記しておくと、「堯舜は孔教の偶像なるゆえんを論ず」は、宗教と哲学の関係、「排孟論」と「孟子論法を知らず」は、論理の正しい応用、「読荀子」は、認識における。世界の正しい措定、そして「易を論ず」は、形而上的「本体」の追求という、それぞれ重要な哲学的課題を担っていたと考えられる。
- (43) この点は、実感に過ぎないかもしれないが、円了が地方巡回で揮筆した格言等を見ると「誠」を含むものがかなり多くあるように思われる。